

江戸時代の地理学者・長久保赤水の業績紹介に尽力する

ひと

さがわ はるひさ
佐川 春久 さん(70)



長久保赤水(1717~1801)は今の茨城県高萩市の農民に生まれ、学問を積んで水戸藩に仕えた。伊能忠敬の実測図より40年ほど早く、天文学や旅人の話などから経緯線入りの日本地図(赤水図)を作った。世に普及し、吉田松陰も地図を手に東北を旅した。地図など資料693点が国重要文化財に指定されることになった。

「重文指定で顕彰活動に弾みがついた」。秋には松陰の旅程を入れた赤水図を複製する予定だ。赤水との出会いは約30年前。高萩市の広報担当職員として広報紙に特集記事を書いたのがきっかけだ。「日本地図作製だけでなく、家柄が幅を利かす時代に、農民から、それも数え61歳で藩主の先生になった。茨城の小さな町にすごい人物がいたことに驚いた」

退職後の2012年に赤水顕彰会の会長に就任。市民とともに高萩駅前銅像を建てたり、読みやすい漫画にしたりして、知名度アップに尽力する。「赤水を通じて地方の人材を思い知った。知られていない人物が各地にたくさんいるはずで、そこに光をあてる代例になれば」。赤水旧宅を記念館にするのが目下の目標だ。

東京・築地の出身。22歳の時、7人姉妹の長女である妻一枝さんが生まれ育った高萩市に移り住んだ。昨年、赤水図の複製3千部を作った時は妹たちが手伝ってくれた。「妻のリーダーシップに感謝です」

文・写真 斎藤勝寿

いばらき 魅力見つけ隊

今夏、高萩市歴史民俗資料館が保管する長久保赤水(1717~1801)の地図、文書、典籍など資料693点が国の重要文化財に指定される。にわかに脚光を浴びる赤水だが、果たしてどういった人物だったのか。長久保赤水顕彰会の佐川春久会長(70)を訪ねると、「幅広い見聞を持ち、あふれんばかりの学者魂で世界に通じる仕事をした人です」と誇らしげに教えてくれた。

赤水は常陸国赤浜村(現在の高萩市赤浜)に生まれ、農業の傍ら儒学や地理学、天文学などを幅広く学んだ。30代半ばで地図作りにも乗り出すと、自らの旅行経験や知人旅人から集めた情報、既存の地図なども参考に、1768年に手書きの「改製日本分里図」を完成させた。その働きが認められ、農民の出でいるながら水戸藩6代藩主

世界に通用 日本地図の先駆者

長久保赤水



JR高萩駅前にある長久保赤水像。右隣には赤水図の陶板も設置し、遺業を市民に伝えていく。高萩市高萩で

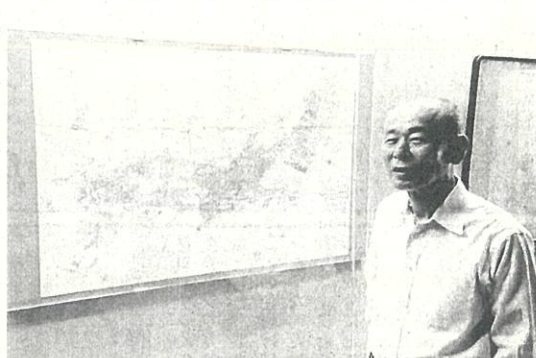
徳川治保の侍講を務めるまでになった。赤水の集大成は1779年に作成した「改正日本輿地路程全図(赤水図)」。日本で初めて緯線・経線を書き込み、緯度1度はおよそ32里(1地図上の1寸(約3センチ)は道の10里)と明示。それまでの地図と比べて正確性が格段に向上した。

赤水図は市歴史民俗資料館に展示されている。料館に展示されている(新型コロナウイルスの影響で休館していたが、6月8日に再開)。佐川さんの案内で展示室に入ると、縦約84センチ、横約1トセラになった「佐川さん」。赤水の死後も明治時代まで約100年が目に飛び込んできた。

「常陸」「下総」「武蔵」など国ごとに色分けされた地図には、地名や主要街道、国境がはっきりと書き込まれている。「初版では約4200だった地名が、(1791)る。さらにはドイツ人に載ることだ。」

「私たちが日本史で習う江戸時代の日本地図と言えは、1851年に伊能忠敬が沿岸部を実測して作成した天白日本海輿地全図(伊能図)」。

しかし、赤水図の完成はそれより42年も早い。日本地図の歴史は赤水が先人の努力の積み重ねであり、佐川さんは「突然伊能図が生まれたわけではありせん」と強調した。



改正日本輿地路程全図と長久保赤水顕彰会の佐川春久会長。高萩市歴史民俗資料館で

幕末の思想家、吉田松陰(1830~59)年一人赤水図を愛用した。東北を巡る旅の際、兄への手紙で「これがな」と自由なで買いために記している。道中、赤浜村にある赤水の墓を参ったという。

ひとくちメモ

【田内隆弘】